

チンコロと冬の市

諏訪町は毎年 1 月に賑わいをみせる。月のうち 4 日間、冬の露店市が開かれ、食べ物や工芸品、「チンコロ」と呼ばれるユニークな縁起物を求める市民や観光客が集まる。

真冬の節季市は、江戸時代（1603-1867）から十日町で開催されている。旧暦の 12 月が一年の終わりであったことから、この名がついた。近隣の村の住民は、冬の間に生産した編み籠など藁や竹で作った道具などの品々を持ち寄った。皆が雪の上に品物を広げ、住民は足りないものを買うことができた。

少なくとも 140 年以上前から、チンコロと呼ばれる小さな米粉を使った色とりどりの人形が市場に並ぶようになった。本来は「犬」や「子犬」を意味する名称だが、一般的には、花や干支のような縁起の良いものが描かれているため、お土産や縁起物として人気がある。時間が経つにつれて米粉が乾燥し、人形にひびが入るが、住民の間では、ひびがたくさん入るほど新年の運勢が良くなると言われている。

現在では、冬を乗り切るために欠かせないものというよりは、イベントとしての意味合いが強くなっているが、チンコロを買うことは今でも重要な体験のひとつで、買い物客は朝から列をなして、お気に入りのチンコロを買い求める。